

風を起こす

<第28回>

見て、聞いて、行動する

高知県馬路村総務課長

木下 彰二さん

戦後、約8500あった村も現在は183残のみである。高知県馬路村もその一つ。実際に訪れてみると「山奥にある、高齢化と過疎化の村」のイメージは大きく覆された。農協では多くの若い女性たちがイキイキと働き、村全体が何だか明るい雰囲気なのだ。



[きのした しょうじ]
1965年、高知県馬路村生まれ。1988年、名古屋にある大学を卒業後、馬路村役場に入庁。出納窓口業務を振り出しに、さまざまな業務を経験。平成19年に産業建設課長となって以降、福祉課長、総務課長と管理職を務める。大学時代に出会った沖縄県出身の妻との間に愛息子が1人。両親も含めた5人家族

人口約950人。1000m級の山々に隔てられた村には信号機もコンビニもない。面積の96%は森林に覆われ、田畑は0・4%。そのわずかな土地で栽培したゆずは、さまざまな製品に加工され年間約34億円を売り上げる。農協が始めた取り組みは、地域ブランドディングの成功例として全国から注目を集めた。製品を売るだけでなく、田舎らしいイメージを前面に押し出して、村を丸ごとアピールする——その戦略は見ごとの中した。

例えば、代表的な商品である「ぼん酢しやうゆ ゆずの村 馬路村」。大手メーカー

の商品に比べて値段は高いが、素朴なデザインのラベルからは、山あいの畑でたわわに実るゆず、丁寧な収穫する村人たちの姿が見えてくるようだ。「自然が豊かで、川もきれいで、のどかな雰囲気なんだろうなあ」。都会の人間は勝手な想像をするが、田舎が田舎らしい風景であり続けるためには、そこに暮らす人々の努力があるのだ。

村自慢の清流が危ない！

「夏になると、息子と一緒に川で鰻を捕るんです。それをさばいてよそから来たお客さ

んに出すと、すごく喜ばれます。正真正銘の天然鰻が食べられるとはすごい！って」
楽しそうにそう語るのは馬路村役場の職員、木下彰二さん。生まれも育ちも馬路村で、大学時代の4年間を除けばずっと村で暮らしてきた。だから、村を流れる安田川の変化も敏感に察知していた。

「安田川は水がきれいで、私も昔はよく泳いでいました。鮎やアメゴなど川魚がたくさ



村役場前のバス停に設けられた「村が〇ごと美術館」。作品の脇には「いいね!」を投票できるシートも置いてある。人形は村のおばあちゃんたち手づくりのかかし。これも木下さんが仕掛けた人口増加作戦の一つ!?

ん捕れる川は、観光客にも人気で、夏休みになると子どもたちでいっぱいになる。ところが、川魚の棲みかとなる穴場や瀬が土砂で埋まるようになり、川魚の生息数が急激に減ってきていたのです」

国有林が75%を占める馬路村は、古くから林業で栄えた村だった。県木に指定される魚梁瀬杉の天然林は、美しい山の景観をつくり出し、生き物たちが命をつむいでいた。豊かな自然環境は、国策で人工林を拡大したことから変化を見せ始める。

「杉の人工林は深く根を張りません。その影響で、山からの土砂が大量に川に流れ込むようになりました。このままでは村の自慢だった川の姿が失われてしまう。何か打つ手立てはないものか」と考えていた矢先に出会ったのが、近自然工法で川の再生に取り組んでいた故福留脩文さんでした」

木下さんが安田川の再生実験を持ち掛けると、福留さんは快く引き受けてくれた。

農協組合長や土木会社社長からの賛同も得て、近自然工法による改修が行われた。台風や大雨で増水した時のことも考慮しながら、川の中に計画的に自然石を配置する。川の流れをコントロールして、土砂の堆積を防ぐ。その結果、川の瀬や瀬が蘇り、翌夏には川魚の増加が確認された。

「魚が捕れる川にするには、まず、魚たちにとって住みやすい環境を整える。それが大事だと改めて実感しました」

村民の満足の延長線上に観光客

手つかずの自然ならいざ知らず、一度人間が手を加えた自然は、放置すれば荒廃する。それを防ぐには人間の手が必要となる。自然と人間の共存。自然環境を守りながら、そこに暮らす人々にとっても居心地のいい空間はどうしたらつくれるのか。

その一つの答えを木下さんは、視察で訪れた熊本県・黒川温泉で見つけた。一時はゴーストタウンと化した山あいの温泉地が、全国屈指の人気温泉地となった理由。それは「自然の雰囲気」にあった。「お客さまは自然の中で癒やされたいのだ」と感じ取った一人の旅館経営者の取り組みが発端だった。自然の雰囲気を出するため、旅館にありがちな松や盆栽ではなく雑木を植える――その手法に木下さんは膝を打った。

「馬路村は杉や檜の単層林が多いのですが、そうすると景色は1色だけ。針葉樹だ

から1年を通じて同じ色です。それよりも季節ごといろいろな色があつたほうが自然に近い風景でしょう?」

10年前、営林署跡地につくった雑木林が、今では「ゆずの森」と名付けられ人々の憩いの場となっている。春の新緑、秋の紅葉と四季折々の表情を見せる雑木林。その中で深呼吸をすると心がほぐれていくようだ。

「木陰のベンチは、村のお年寄りがひと休みできるようにと置いたものです。でも、その隣りに観光客が腰を下ろし、言葉が交わされることだってあるかもしれません」

観光客も大事だが、優先順位としては村民の満足度を上げるほうが先。「住みやすい環境の延長線上に、観光客の満足がある」と木下さんは考える。

良好な人間関係を醸成するツールとして、木下さんは「村が〇ごと美術館」をオープンさせた。と言っても、経費は村特産材の額縁代のみ。それも木下さんの自腹。村の小中学生が描いた似顔絵や風景画を額に入れ、バス停の待合所や郵便局などに飾って美術館としたのだ。

「子どもたちにとっては、自分の描いた絵を村のみんなに見てもらえることが嬉しいんです。同時に、それは村民への話題提供になります」

作品は木下さんの手で定期的に入れ替えられる。村の事業ではなくあくまでも個人の取り組み。その小さな積み重ねが、村の雰囲気づくりに一役買っている。



イタリアンレストランが1軒もない村で本格ピッツアが食べられるとあっては、並ばずにはいられまい



イタリアで開催されたナポリピッツァ職人世界選手権で日本人として初優勝した牧島昭成さんが、子どもたちに夢を与えてくれた

「できない理由」を探さない

2014年、日本創成会議が発表した消滅可能性都市は全国に大きな衝撃を与えた。896自治体の中には馬路村も入っているが、木下さんはあまり気にしていない。

「数字だけにとらわれてしまうと、間違った方向に進んでしまいかねません。大事なことは住民をいかに豊かにするか。高齢化率が高くて、住民が豊かさを実感できればいいのではないだろうか」

交通の便が悪く、商店もほとんどないなど圧倒的に不便な馬路村。それでも木下さ

んは「土地のハンディを感じさせず、子どもたちに夢を与えたい」と策を練る。

2010年10月、馬路村では1日限りのピッツア店に行列ができた。腕を奮ったのは、同年イタリアで開催されたナポリピッツァ職人世界選手権で日本人として初優勝した牧島昭成さん。木下さんが来村を打診すると、牧島さんはピザ釜を積み込んだワゴンで乗り付け実演してくれた。目の前で見る世界一の技。生まれて初めて食べる本格ピッツア。大興奮だった子どもたちの将来の夢には、新たな選択肢が加わったことだろう。

不便な村、予算のない村に、一流と言われる人々を次々に呼んできた木下さんは「できない理由」を探さない。

「とにかく動いてみる。そこから道が開けてくるんです」

講演で一流の人たちの話を聞くと、自身も大いに刺激を受ける。

自然栽培のリンゴ農家・木村秋則さんの講演に触発され、木下さんは役場の若手職員2人と共に米の自然栽培を始めた。手間がかからない栽培法は高齢者でもできるし、農薬を使わないから安心安全な米が穫れる。農業経験がない木下さんの挑戦に周囲は無謀だと言ったが、米の出来は上々。2年目には田んぼの面積を2倍にし、地元の小学生と一緒に収穫した米は学校給食に提供した。今はまだ実験段階だが、うまくいけば耕作放棄地という村の課題を解決できるかもしれない。

村には独り暮らしのお年寄りも多いものの、日曜日に食事できる店がない。そこで村の女性が2000円弁当を提供し始めた。ただ、問題は赤字になること。相談を受けた木下さんは、玉造温泉で見た、観光客が源泉水をお持ち帰りできるボトルの販売を試してみた。すると、3カ月で約7万円の利益が上がり材料費や人件費に当てることができた。この方法が軌道に乗れば、2000円弁当の活動は持続可能となる。

「この先、何があつたとしても排除できない仕組み、村民だけで続けていけるような仕組みをつくりたい」

視察先で素晴らしいアイデアを見ても、多くの人がそこで終わってしまう。でも、木下さんはいいと思えば食欲にマネしてみる。だから、村を歩けばそこかしこで木下さんが仕掛けたことに出くわす。

仕事をしながら、一生ものの財産づくり

特にやりたいこともなく入った村役場で、木下さんが仕事を面白く感じ始めたのは入庁3年目、村民の要望を受け講演会や文化教室を企画するようになってからだ。村民は喜んでくれたが、それでもまだやりたいことは見えていなかった。

転機のきっかけは、30代半ばに直面した妻の大病だった。

「カミさんが死ぬか生きるかと闘っている。それなのに自分は一体何をしているんだ。大



マジシャンとして舞台上に立つことも多い



便器のふちまで丁寧に磨く木下さん。「慣れれば平気ですよ」とのことだが...

した仕事をしているわけでもなく、民間企業のように赤字やリストラというリスクも背負っていない。命懸けでやれば、何だってできるじゃないかと思っただけです」

「ひきずり回されるより、ひきずり回せ」
——蚊帳の外で引つ張り回す10年と、自分を中心になって引つ張り回す10年では、10年後の結果が全然違ってくる。農協の東谷望史組合長から聞いたその言葉が心に響いた。

講演に招いた株式会社イエローハットの創業者・鍵山秀三郎さんの「掃除に学ぶ」に感銘を受けた木下さんは、講演の翌日から始業前30分の清掃活動が続いている。観光客が多い土日に汚れた公衆トイレは、毎週月曜日に清掃。素手に雑巾1枚だけで、便器の中までピカピカに磨き上げる。雨が降ったら公用車を洗い、その他の日は街頭

のゴミ拾いという活動をたった1人で、もう7年間続けている。

「きれいなトイレは使う人もきれいに使います。親がトイレをきれいにする姿を見れば、子どももマネします。清掃活動が続けることで、周りが少しずつ変わります」

道を歩けば顔見知りばかりという村内で、仕事だ、プライベートだなどと言ってはもらえない。というより「休みという観念自体がないですね」。

役場の行政職は現在28名。職員数が少ないため、「税金」と「土地対策」と「給与」と「村の振興計画」といった具合に、1人でいくつもの仕事を兼務する。若い職員が多く、木下さんは49歳にして2番目の年長者。42歳で管理職を勧められた時、はじめは躊躇したが、やりたいことがあれば自分で説明して責任も取れるとプラスに発想して引き受けた。以来ずっと課長職。でも名刺に肩書きはない。

「相手を役職で見る人は、役職が無くなっ

てしまえば離れていきますから」
パスポート風、運転免許証風と趣向を凝らした名刺にはすべて、名前の横に「好夢員」と書かれていた。公務員の仕事は好きだし、やりがいも感じる。とは言っても、奉仕の精神だけで、高いモチベーションを維持するのは難しいと思う。

「たまには自分のやりたいことを形にしてみるのも、一手だと思えますよ」

村の生きがい対策事業でマジック教室を

開催したのは、村民の声だけでなく木下さん自身もプロのマジックを見てみたかったから。マジシャンによる手ほどきを受けた村民たちは、その後マジッククラブを立ち上げた。名付けて「うまじつく倶楽部」。倶楽部では、老人福祉施設などから年間30本ほどマジックショーの依頼を受ける。

「メンバーの大半は退職後の高齢者です。それでも、舞台に立てば観客は一人のマジシャンとして見てくれます。保育園でマジックを披露すると、園児たちから尊敬の眼差しが注がれ、惜しみない拍手がおくれます」
だから「マジックの腕を磨こう」「健康に気をつけよう」「入院なんかしてらんねえ」となる。メンバーにとつてマジックはまさに生きがい。それは木下さんにとつても同様。結果として、自分がやりたいことと村民に役立つことが重なった。

「自分自身がワクワクすれば、人の心も動かせる気がしますね」

新しいことにチャレンジすれば、そこにはリスクもつきまとう。それでも、チャレンジしなければ後悔をずっと引きずってしまふ。

「だったら、リスクを取ってでもチャレンジしようと思うんです。失敗しても得るものはあるし、それが自分の財産になる。どうせなら、仕事をしながら、自分の財産にしていってほしいでしょう？」

次は一体どんなワクワクが見られるのか、村民は楽しみにしていることだろう。

(取材／ライター 更田沙良)